



AET1 and AET2
Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB and Part II

Friday 9 June 2017 13.30 to 16.30

Paper J7

Literary Japanese

Answer **both** sections and **all** questions.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet
Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

None

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

SECTION A

(1) Translate the following passage from an **unseen** text into English. The notes are for reference only. [40 marks]

京都みやこの鼠ねずみと田舎いなかの鼠ねずみ^四

ある時、繁華はんかの土地五の鼠ねずみが、片田舎六へ下りければ、田舎の鼠ねずみは、これを敬うやまひ、もてはやしける七が、都みやこの鼠ねずみは田舎の鼠ねずみを勧すすめて、繁華の地へ連れ上のぼり、その不自由なきを見せんと、自慢の心にて、田舎の事を譏そしりながら伴のぼひ上りしが、まづ我が都の

Notes

- 四 中巻18「京と田舎の鼠の事」(九四頁)。
- 五 栄え賑わう場所。都会。
- 六 都を遠く離れた土地。
- 七 大切に扱う。歓待する。

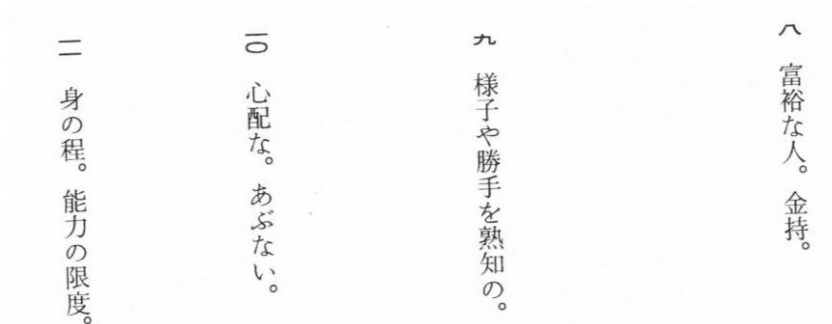
Question 1 continued...

住居すまいを見せて驚かせんと、その住家すまかへ伴ひぬ。もとより有徳うとくなる人の土蔵へくらなりければ、食物しょくもつも多くあり、米は俵はしにて積み重ねあるを、田舎の鼠に見せて、「都は此かくの如く乏とちしき事なければ、賤しく不自由なる田舎に住まひてあらんより、都に住みて楽しみ給へ」と言ひ聞かせ、自慢をして居る所へ、この家やの主あるじが、俄にわかに蔵の戸を開きて、慌あわたぶしく入り来たりければ、都の鼠は案内を知りたる蔵ぐらなれば、早くも穴へ逃げ入り隠れしが、田舎の鼠は不案内のこと故、慌て騒げども、隠れ所なく、うろたへ惑まどひ、やうく逃げて、命ばかりを助かりけるにぞ。大きに恐れて、都の鼠に向ひ、「其元そのもとは、『都に良き事ばかりあり』と云ふて連れ上り給へども、只今のやうなる気遣きづかはしき事ことありては、命も縮まる思ひにて、危あやうきことなり。田舎は不自由なるやうなれども、万事が気楽なり」とて、そうく故郷こきやうへ帰りしとぞ。げにや、この譬への如く、その身の分限ぶんげんを守りて、人のよろしき話も羨み、故郷を離れ、又は馴れたる事を捨て、ほかへ心に移すまじきものなり。

(TURN OVER)

Question 1 continued...

Notes



E'iri kyōkun chikamichi, in MUTŌ SADAŌ (ed.), *Isoho monogatari* (2000), pp. 212, 213, 216.

Vocabulary list

- 繁華 prosperous
自慢 self-conceit
譏る to slander, to criticise
土蔵 warehouse
俵 a rice straw-barrel
積み重ね to pile up
賤しい lowborn, poor
俄に all of a sudden
慌ただしい hurried, rushed
うろたふ to be confused, to be flustered
譬へ allegory, fable
羨む to envy
馴る 慣れる

SECTION B

(2) Translate the following passage from a **seen** text into English. [14 marks]

神武天皇より十二代、成務天皇と申し奉るは、
限りなくめでたき御世なり。此みかどに男みこ、
姫宮三十八人の皇子おはしける。卅八人めは、
姫宮にてわたらせ給ふ。数も知らぬ程の皇子た
ちの御末なればとて、その御名をさざれ石の宮
とぞ申しける。御かたち世にすぐれめでたくお
はしければ、あまたの御中にもこえて、御寵愛
なめならず、いつきかしづき給ひける。さる
程に御年十四にて摂政殿の北の政所に、移し参
らせ給ふ。めでたき御おぼえ、一天四海の内に
上こそ人こそなかりけり。
さざれ石の宮、世間の有為転変のことわりを、
つくづくおぼしめしよりて、それ仏道を願ふに、
浄土は十方に有りと聞けども、中にもめでたき
浄土は、東方浄瑠璃世界にしぐはなしとおぼ
しとりて、常に怠らず、薬師の御名号南無薬師
瑠璃光如来と、となへ給ふ。

Sazareishi, in Ichiko Teiji (ed.), *Otogizōshi* vol. 1 (1996), pp. 226-227.

Comment on the grammar points below (see underlined passages): [6 marks]

姫宮にてわたらせ給ふ [2 marks out of 6]

さざれ石の宮とぞ申しける [2 marks out of 6]

おぼしめしよりて [2 marks out of 6]

(TURN OVER)

(3) Translate the following passage from a **seen** text into English. [20 marks]

廿六 学文仕様の事

人ハ、家職の透ぐにハ、学文を情に入、心にかけてきものなり、いにしへの人の、いハれし事ハ、聞ほどの「四オ事、よろしく、家職のためにも、猶よし

誠に、あはぬむかしの、聖人賢人にあふて、いさめを、直にきく、心地するものなり、我か心に、尤とおもへハ、其人を友として、はなす心地すれハ、めてたき友を、求たるに、ひとしき事成へし、されハ、うき世の、あしき風俗の、友だちと、はなさん事ハ、無下成べし

文学の理も、きこえかたく、よむ事のならぬ書物ハ、気のどくと思ハ、かなもの、いかほども、道理のわかりたる、草紙の物おほし、学文と云ハ、文学をしり、漢書を学はかりか、学文にあらず、かなものに「四ウても、よむ事ならぬほどならハ、今時の学者にあふて、五常と云ハ、いか様の物、五倫と云ハ、いか様のものと、口にて、たつねてなり共、しりて、それを、学ぶを学文と云
左様なる人と咄したきもの也

Kashoki atooi, in Kanazōshi shūsei vol. 16 (1995), pp. 253-54.

(4) Translate the following four **seen** *waka* poems into English and comment on them as appropriate. Please disregard the note numbers in the text. [20 marks]

410
思おもふ
かからころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ

113
に
花はのいろはうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしま

9
霞かすみたち木このめも春の雪ふれば花なき里さとも花ぞちりける

1
年としの内に春は来にけりひととせを去こ年ぞとやいはむことしとやいは
む

Kokin waka shū, in KATAGIRI YŌICHI (ed.), *Nihon koten shinsho* (1980), pp. 38, 41, 77, 184.

END OF PAPER